MARUZEN
ISSN 1883-5767
丸善ライブラリーニュース　第5号（通号157号）2009年2月23日
発行／丸善株式会社　発行人　小城武彦

LIBRARY NEWS

第5号

「知識基盤社会を担う大学図書館と哲学」

お茶の水女子大学　羽入 佐和子

あえて賢くあれSapere aude!

“Sapere aude”は、カント（Immanuel Kant）が「啓蒙とは何か」（1784）で用いたホラティウス（Quintus Horatius Flaccus）の言葉として知られている。

イタリア北部の美しい都市パヴィーアに、パヴィーア高度教育研究大学IUSS-Pavia (Istituto Universitario di Studi Superiori Pavia) がある。この大学は、その起源を9世紀にまで遡り、20世紀末以降、新たな世紀に向けた学際的な研究を特徴とするイタリアの高度教育研究機関のモデルとして機能している。昨年、この街を訪問した私は、その機関のロゴ“IUSS-Sapere aude”に出会った。パンフレットにも、“Sapere aude”とあわせてカントのこの論文の内容紹介が記されている。

「あえて賢明であれ！」「知性を駆使するように努めよ！」「知る勇気をもて！」などとも言い換えられる。

「啓蒙」とは、文字通り「蒙（くらさ）」を「啓（ひらく）」こと、自ら考え、事柄を顕わにすることを意味する。それは、「当然のこと」と思われている事柄を改めて問い、その本質を顕わにする思考態度である。21世紀の今この言葉に何故注目するのか。カントは次のように語る。1）

> 啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである。ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である。ところでかかる未成年状態にとどまっているのは彼自身に責めがある、というのは、この状態にある原因は、悟性が欠けているためではなくて、むしろ他人の指導がなくても自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気とを欠くところにあるからである。それだから、「敢えて賢こかれ！(Sapere aude)」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」―これがすなわち啓蒙の標語である。

未成年のままにとどまるのは気楽なだけでなく、自分に代わって考え判断する人の存在を許し、自ら考える必要がなくなる、とカントは忠告する。

高度情報化、経済優先、効率化、成果主義、そして無力感や現実感の喪失。これらが現代の社会を特徴づけている。あるいは、現代は「知識基盤社会」ともいわれる。このような時代に大学図書館には何が期待されているのか。それは、人が未成熟から脱し、「お

とな」として自ら考え、物事の本質を見極め「知る」機会を提供することに他ならない。つまり、「おとな」になるための図書館であり、「知性を駆使するように努める」人々とともに存在することであるといえるだろう。

おとなの図書館

お茶の水女子大学附属図書館は、平成20年に「おとなの図書館」キャンペーンを開始した。ことの発端は、利用学生から寄せられた意見にある。

図書館備え付けの意見箱に、キャリアカフェでの話し声がうるさい、という投書があった。キャリアカフェは、キャリア教育の強化を意図した教育プログラムと図書館が連携して設けた館内のスペースで、ここでは飲み物を手に、学生同士が、教員と学生とが語り合える。そして週一回は、先輩がキャリア・アドバイザーとして待機していて学生の相談に応じている。図書館を入ると右手にはロビーが、正面にはこのカフェがある。当然、会話することを前提としていて、時には学生企画の研究発表会が行われたりもする。

二階建ての小さな図書館ながら、一階は比較的自由で開放的な空間で、二階では静寂を保てるようにし、最も奥に大学院生専用のスペースを設けてある。

キャリアカフェでの、話し声がうるさい、という投書に図書館としてどう対応するか、職員が考え、工夫した結果が「おとなの図書館」キャンペーンである。「おとな」として振る舞える学生であることを図書館は期待している、というメッセージをこのような形で発したのである。

大学図書館は、利用者がおとなであることを前提としている。それは、マナーだけではない。大学生は主体性と自立性を備えているはずであり、大学図書館は、より学術的に成熟するための環境であることが求められる。

知識基盤社会を担う大学図書館

「お茶の水女子大学附属図書館は、時間と空間を超える知的交流の場であり、次世代の知を創造し発信する学術情報基盤として機能する。」

平成17年に図書館職員が時間をかけて議論し作成したこの図書館の理念は、図書館が人と人との、あるいは過去の知と現在の知とのコミュニケーションの場であり、そこから新たな知が創造されることを期待し、図書館をそのように機能させようという職員の決意表明である。

インドの図書館学者ランガナタン(Shiyali Ranganathan)は、「図書館は成長する有機体である」と、図書館そのものの有機的成長を表現した。これに加えて、今とくに大学図書館には、利用者である学生を教育し知的成長を促す積極的な役割が課せられているのであり、このことは知識基盤社会を担う大学の役割と密接に関連している。

平成27年から32年頃までを想定して高等教育のグランドザインを描いた中央教育審議会の答申「我が国の高等教育の将来像」(平成17年1月)では、21世紀を「知識基盤社会」の時代と捉え、今後の高等教育の在り方についての提案がなされている。この答申には、大学が社会の変化に対応し、教育と研究の質を向上させ、国際競争力を高めることが強く求められ、大学の公共的役割と社会的責任が強調されている。

また、「学術情報基盤の今後のあり方について（報告）」（文部科学省 科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会 平成18年3月）には、「大学図書館の基本的役割」が次の二点に集約されている。（同報告書p．67）

☆高等教育と学術研究活動を支える重要な学術情報基盤であり、大学にとって必要不可欠な機能をもつ中核施設

☆電子情報と紙媒体を有機的に結びつける新たな意味での「ハイブリッド・ライブラリー」の実現

図書館は大学の中核として、大学と協働して教育と研究を担う。とくに現在、資料の電子化が急激に進み、この事態に対応するためにも図書館機能は多様化せざるを得ない。

「答申」は、「知識基盤社会」を「知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会」と説明している。したがって、知識基盤社会を担う学生に対して、知識の実質的な獲得を促し、その成果を以って社会の発展に寄与することが大学に期待されている。そこで、学生の知識獲得に大きな役割を果たしてきた図書館は、いっそう大学の中核としての意義を高めている。そしてさらに知識の基盤をなす学術情報が、高度なＩＴ化によって急速に図書館の多様化を強いていることから、図書館のハイブリッド化が求められてくることになる。

ハイブリッド・ライブラリー

知的媒体が多様化する状況の中での「ハイブリッド・ライブラリー」として図書館には何が求められているのか。

まずは、電子情報への対応、あるいは情報化社会への対応である。そしてさらには、従来からの図書館の役割である学生の学習支援、教育支援の多様化を考慮しなくてはならない。

第一の点である電子情報に関して多く論じられるのは、電子図書館や電子ジャーナルの問題である。

電子ジャーナルについては、財源の確保だけでなく、研究者が研究成果をいかに発信するか、また研究業績が何によって評価されるかという点に、この問題を論じる際の困難さがある。

また、資料の電子化は効率性や利便性の点で魅力的である。反面、電子情報の恒久性が疑問視される場合もある。これはテクニカルな問題として将来的には解決可能であるかもしれないし、あるいは、資料の特性に応じた対応によって解決できる部分もある。

そして第二には、大学での教育内容が、学問そのもののあり方や情報化によって変様しつつあることから、教育カリキュラムに注目し、学生のキャリアを視野に入れた能動的な図書館への転換が期待される。

大学図書館は、授業に関連する図書、研究に必要な資料を備え、利用者の便宜を図るように努めてきた。専門分化が先鋭化する一方で、現実には専門領域を横断する問題が生じ、それへの対応が必要とされている。それに伴って学問の形態も変化し学際性が進む。将来社会で活動する学生

を利用者として擁する図書館は、社会のこうした変化にも敏感でなければならない。

しかも、知的交流の場である図書館は、学生にとって必要な資料を入手するだけの場ではなく、分野の異なった人や資料と出会える場でもあり、利用者は、期せずして、別の視点や別の尺度を発見するかもしれない。図書館は知的領域を拡大するチャンスを提供できる場にもなる。未知の世界、未知の領域に出会うことによって、人は知的に成長する。異なる価値、異なる判断に触れることで思考に広さと深さが生まれる。それは、既存の秩序や体系をあえて問い、自ら考え判断する能力を育むに違いない。こうして未成熟を脱し、自ら主体的に考えることは哲学的態度の基本でもある。

知識基盤社会における哲学的思考

“Sapere aude!”と語りかけたカント哲学の特徴の一つは、科学的知の位置づけと限界の設定にある。

科学は実証性と論理整合性を確保することで合理性があるとみなされ、一般的に受け入れられる。しかし、私たちは、実証的に検証できることだけを「真」とみなすわけではない。人は、自由や神や永遠について論じもする。また、同一律や排中律や矛盾律を論理的に「恒真」と認めながらも、弁証法的な思惟を展開し、あるいは「空」を論じる。それは、人が「理性」をもち「生きる」存在であることと深く関わっている。つまり、私たちの思考は対象の多様性に即して作用する可能性を常に秘めているのであり、科学的対象には科学的な思惟が、行為に関する事柄には実践的な思惟が、超越的な問題に対しては、超越的な思惟が作用する。したがって、哲学は議論の前提そのものから問いを始めることを基本とし、科学的思考や科学的知識を絶対的なものとはみなさない。さらにそれは、一人ひとりがそれぞれが新たに問うことでもある。

ドイツの実存の哲学者であるカール・ヤスパース（Karl Jaspers）は哲学の特色を次のように語る。2)

哲学的思惟には、科学のように進歩の過程という性格がありません。確かに、私たちはギリシャ時代の医者であったヒポクラテスよりもはるかに進歩しています。しかしプラトンより進歩しているとはいえないのです。私たちは、プラトンに利用できた科学的認識の材料に関してだけなら彼より進歩しているといえます。しかし、哲学すること、そのものに関しては、私たちは、もう一度彼の水準に達することはほとんどないでしょう。

近代以降、科学は人類に物質的な豊かさをもたらした。私たちは物の豊かさを求め、自然を解明する科学は技術を進歩させて、その欲求を充たしてきた。そして、進歩と発展を求めて来た現代の私たちは、いつの間にか、立ち止まって考えることを忘れてしまったかのようである。便利さや効率化を是とし、常に変化を求める日常の中で、変わらないもの、ものの本質を見失うことのないように、改めて、豊かさとは何か、進歩とは何か、そして人間存在とは何かが問われるべき時のように思われる。

知識が社会を駆動するという「知識基盤社会」を形成している知は、蓄積された古典的な知から近代科学の知、そして情報化時代の知にいたるまで多様である。この知の展開過程では幾度かパラダイムの転換がなされた。トーマス・クーン（Thomas S. Kuhn）は、「科学革命の構造」（1962）で次のように語っている。3)

新しいパラダイムに導かれて、科学者は新しい装置を採用し、新しい土地を発見する。さらに重要なことは、革命によって科学者たちは、これまでの装置で今まで見慣れてきた場所を見ながら、新しい全く違ったものを見るということである。

そして今日、高度な情報化が大量の情報を一瞬にして伝達するとともに、その電子的伝達手段の質的多様化が社会構造に変革をもたらしつつある。私たちは居ながらにして遠隔地の情報を入手でき、時間を超えて共通の膨大な情報に瞬時に触れることもできる。この事態は確かに私たちの生活を便利で豊かにした。しかし同時に、時間と空間という基本的な制約を超えた別の世界、つまりサイバー空間というヴァーチャルな世界を成立させることにもなった。そして、人間が現実に生きる空間とヴァーチャルな空間とを混同させるほどに技術は進歩してきている。あるいは、私たちは質を異にする二つの空間を手に入れたともいえる。この事態が新たな思考の枠組みを提起し、パラダイムの転換をもたらすのかはともかく、私たちはこれまで経験のない新たな知の形式を獲得したといえる。

とはいえ、知を駆使する私たち一人ひとりが身体的存在として有限な時を生きることに変わりはない。しかも一人ひとりが固有の歴史を刻み、代替不可能な存在として生きている。そうした個々人がそれぞれに自らを問い、本質を問い、判断することが哲学的態度である。

そして今日の大学は知識基盤社会の担い手として、それぞれの特色に相応した機能を自覚的に果たすことを求められている。つまり大学での教育は、社会的要請に対する即時の対応が重視され、それに伴って、教育内容と教育体制は可変的であることが期待され流動化を高めつつある。この状況にあって、伝統的で歴史的な知を収集し、蓄積し、提供できる図書館は、大学の中で唯一悠久の時を生き文化を蓄積できる場として、その重要さを増している。なぜなら、そこでこそ普遍性のある知の維持と生成がなされうるからである。

大学図書館は未来を担う人々の知的交流の場であり、一人ひとりが、他者の判断に依存することなく、自らの能力を発揮して努めて知を求め、考え、新たな知を創造し発信する学術情報基盤を象徴する場として、その役割を発揮し続けることが21世紀の今まさに期待されている。

（副学長・附属図書館長）

参考文献
1）I.カント「啓蒙とは何か」（1784）
篠田英雄訳 岩波文庫 1974
2）K.ヤスパース「哲学入門」（1949）
草薙正夫訳 新潮文庫 2005
3）Th.クーン「科学革命の構造」
中山茂訳 みすず書房 1971